

中津野遺跡と掘り出された 南さつまの歴史と文化



弥生時代の船の部材



中津野式土器

■ 日時

令和4年7月9日（土）
13:00～16:30

■ 会場

金峰文化センター

主催：鹿児島県立埋蔵文化財センター

共催：南さつま市教育委員会・公益財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター

【かごしま遺跡フォーラム 2022 日程】

令和4年7月9日（土） 金峰文化センター

- 12：30 ～ 受付
- 13：00 ～ 13：10 **開催のあいさつ**
鹿児島県立埋蔵文化財センター所長 中原一成
南さつま市教育委員会教育長 北園博之
- 13：10 ～ 14：00 **講演**
「縄文時代・弥生時代の中津野遺跡周辺」
前鹿児島県考古学会会長 本田道輝氏
- 14：00 ～ 14：05 **休憩**
- 14：05 ～ 15：30 **発表**
「古墳時代から中世の中津野遺跡周辺」
南さつま市教育委員会 新屋敷久美子・橋口亘
「中津野遺跡の発掘調査成果～最古級の舷側板など～」
鹿児島県立埋蔵文化財センター 鮫島えりな
- 15：30 ～ 15：45 **休憩**
- 15：45 ～ 16：25 **パネルディスカッション**
「発掘調査から見てきた中津野遺跡周辺の歴史と文化」
本田道輝氏・新屋敷久美子・橋口亘・鮫島えりな
司会：鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課長 寺原徹
- 16：25 ～ 16：30 **閉会のあいさつ**
鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター長
中村和美

ごあいさつ

本日は、かごしま遺跡フォーラム2022「中津野遺跡と掘り出された南さつまの歴史と文化」によるこそお越しくございました。

このフォーラムは、鹿児島県立埋蔵文化財センター並びに鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが、県内各地で行った発掘調査の成果について、遺跡の歴史的意義や価値、新たな発見などを、県民の皆様にはわかりやすくご紹介することを目的としています。

第9回目の今回は、令和3年3月に開通した国道270号宮崎バイパス工事に伴って、平成18年から平成29年度まで発掘調査を行った「中津野遺跡」とその周辺をテーマに、国内最古級の弥生時代前期後半（約2,500年前）の船の一部（舷側板）など、地域で掘り出された遺跡・遺物から南さつまの歴史的特性を明らかにしていきます。

このフォーラムをきっかけとして、鹿児島県の歴史や文化を発掘調査の成果から解明することの意義を理解いただき、地域の埋蔵文化財保護に共感いただければ幸いです。

最後になりましたが、フォーラム開催に当たり特段の御協力を賜りました南さつま市教育委員会の皆様、調査に協力いただいた地域の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和4年7月9日
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 中原一成

目次

| | |
|-----------------------------------|----|
| 縄文時代・弥生時代の中津野遺跡周辺・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 |
| 前鹿児島県考古学会会長 本田道輝氏 | |
| 中津野遺跡周辺における古墳時代から古代の遺跡・・・・・・・・ | 10 |
| 南さつま市教育委員会 新屋敷久美子 | |
| 中世～近世の中津野遺跡の周辺 | |
| —中国の石造物と中津野遺跡出土ベトナム陶器に注目して— | 12 |
| 南さつま市教育委員会 橋口亘 | |
| 中津野遺跡の発掘調査成果 ～最古級の舷側板など～ | 20 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター 鮫島えりな | |

縄文時代・弥生時代の中津野遺跡周辺

本田道輝

いまから 50 年近く前になりますが、私は加世田に住み休日には万之瀬川下流域に広がる台地や平野で遺跡や遺物を探して歩き回っていました。その際よく聞いた言葉は「こんなもの（土器のかげら等）はこの辺ではどこにでもある」「こんなものがあるから何もできなくなる」でした。ご存知だと思いますが、遺跡は当時の人達が生活した跡であり、土器等の遺物は生活する中で使った道具類です。どこにでもあるということは、この地域にはいろいろな時代に多くの人々が生活していたからにはほかなりません。実は、この地域は鹿児島県内でも有数の遺跡の密集地として知られています。この付近でどこにでもある状況は、本当は県内のどの地域にでもある状況ではないのです。遺跡と現代の人々の生活との共存はたしかに難しい面もありますが、この地にどのような人々が住み、どのような生活をして地域の歴史が紡がれてきたのか、なぜその痕跡がほかの地域よりも多いのか、是非遺跡が語る当時の出来事にも耳を傾けて欲しいものです。

短い時間ですので、私が担当する縄文時代・弥生時代に該当する遺跡から 5 遺跡を選び適宜他の遺跡の状況も交えながら話を進めたいと思います。

かこいのほら 柁ノ原遺跡（加世田村原）

村原の独立した台地上にあるこの遺跡は、昭和 49（1974）年地下げ中に発見され、以後区画整理事業等に伴って何回か発掘調査が行われました。その結果、旧石器時代から戦国時代にかけての長い時間利用された複合遺跡（時代の異なる遺跡が同一場所で上下に重なって存在する）であることがわかっています。ただ、縄文時代で最も古い草創期の遺物や遺構が発見されその重要性から平成 9（1997）年国の史跡に指定された地点を除けば、他の地点は残念ながら調査後削平されて現在は残っていません。

縄文時代草創期の遺跡は台地の北西部にあり、桜島の噴出物であるサツマ火山灰（最近では約 12800 年前の噴出物と言われています）の下の層で発見されました。隆帯文土器りゅうたいもんと呼ばれる土器や石器（磨製や打製の石斧・石鏃・磨石や敲石・石皿等）、その時期の遺構としては集石や配石炉、燻製用施設と言われている煙道付炉穴等が発見されています。最初期の土器や縄文時代的な石器で構成される遺物、大地につくり付けられた多種類の遺構の出現は、遊動生活から定住生活への変化を示すものとされ、この遺跡では未発見ですが竪穴住居址が発見された同時期の遺跡もあります。特徴的な石器として丸ノミ形石斧があり、その形状から抉ったり削ったりする道具で「柁ノ原型石斧」と呼ばれ、丸木舟の内面を抉るための道具であったと考える研究者もいます。

なお、隆帯文土器の全体の姿がわかる資料がこの遺跡の南西 4,5 km 程にある志風頭遺跡しかぜがしら（加世田内山田）から出土しました。以前は縄文時代草創期の土器であればごく小破片でも博物館等の展示資料であったことを考えるとただ驚くばかりです。

柵ノ原遺跡や志風頭遺跡の資料は加世田郷土資料館（南さつま市民センター3階）に展示されています。

阿多貝塚（金峰町宮崎）

阿多貝塚は金峰町に広がる平野部の南端、国道270号線沿いの台地端部にあります。この場所は海岸から4km近く離れているにもかかわらず貝殻が出るとして、古くから貝殻崎とよばれていました。昭和11（1936）年縄文時代の貝塚であることが確認され、出土した縄文前期土器は阿多式土器と呼ばれていた時期もありましたが、のちに**轟貝塚**（熊本県宇土市宮庄町）を標式遺跡とする轟式土器の中に包括されました。昭和53（1978）年確認調査が行われ、出土遺物は南さつま市歴史交流館金峰に保管、展示されています。なお、学術上きわめて価値の高い南九州を代表する縄文時代前期の貝塚として令和2（2020）年国指定史跡となりました。

阿多貝塚では、ハマグリやマガキの堆積した層の中から、縄文時代前期前半の轟B式土器（7000年程前）とともにシカやイノシシの骨、骨角器（鏃や針状に加工されたもの）、特徴的な形状の**玦状耳飾**（滑石や蛇紋岩等の加工しやすい石を扁平なドーナツ状にして一か所に切れ目を入れたもの）等が出土しました。

縄文時代前期は、温暖化による海面上昇（縄文海進）がピークに達し、海岸線は今よりかなり内陸にあったことがわかっています。さらに、7300年程前には薩摩半島南の海底火山（鬼界カルデラ）が巨大噴火を起こして火砕流が発生しました。それは海を越えて瞬く間に薩摩半島や大隅半島に到達し、うっそうとした森林が消え、かなりの年月を経てやっと草原として復活するという自然環境の激変があったこともわかっています。この鬼界カルデラの噴出物は阿多貝塚でも貝層の下に確認され、この地も同様な状況であったことがわかります。

南九州では貝塚は数少なく、本来この地域の縄文人たちは木の実などの植物質食料を主として生活し、海の資源はあまり利用していないようです。縄文前期に貝塚が作られるのは、やっと草原地帯として復活した地域へ進出した縄文人たちの、海の資源への依存が強かったことを示しているのでしょうか、この時期石鏃の数がきわだたて多いのも、必死で小動物を追い求めた証でしょう。そのような困難な生活環境の中でこの地域に住みついた人々が残した遺跡の一つが阿多貝塚です。その後この地域には再び良好な縄文時代の遺跡が形成され、活発な縄文人の活動が確認できますが、阿多貝塚を形成した人々はその先駆けとなった人々といつて良いでしょう。

なお、阿多貝塚に隣接して同じ時期のブロック状の貝層を持つ**上焼田遺跡**（金峰町宮崎）や縄文時代中期の遺物が多く発見された**堀川貝塚**（金峰町宮崎）等が知られ、この地域は県内では珍しく貝塚が密集する地域となっています。

上加世田遺跡（加世田川畑）

柵ノ原遺跡と沖積低地を挟んで南西800m程の川畑の台地西端、南さつま市役所近くに上加世田遺跡は立地します。昭和43（1968）年地下げ中に遺跡は発見され、その後の宅地

造成や加世田川の河川改修等により遺跡の大部分は発掘調査後失われてしまいましたが、未調査のまま消えてしまった箇所も多いと思われます。

発掘調査で注目されたのは遺跡の一角にみられる大きな楕円形の窪地状地形で、そこでは鹿児島県で初めての明瞭な土偶、岩偶を始めとする軽石加工品、ヒスイ（後にクロム白雲母と分析されました）の勾玉、管玉、小玉等の玉類、打製や磨製の石斧、石鏃、異形石器等の石器類、上加世田式土器と命名された縄文時代後期末（3500年程前）の大量の土器群、点々と存在する焼土や灰が検出され、この場所で何らかの祭祀が行われていたと考えられています。また、玉砥石や玉類に利用された石材の原石破片も発見され、この遺跡で玉類の製作が行われていたことも明らかになりました。同じ石材の縄文玉類はその後**大坪遺跡（出水市美里町）**でも多量に見つかり、石材の原産地がどこなのか気になるところです。一方、軽石製岩偶は大正9（1920）年**小廻遺跡（霧島市福山町小廻）**で出土が報告されたものの現物不明で謎とされてきましたが、上加世田遺跡での出土でやっとその実体が明らかとなりました。その後**終原貝塚（垂水市終原）**でも多量に見つかりましたが、その分布域は現在のところほぼ鹿児島県内の本土域となっています。当時人々が何の目的でこれら岩偶を制作していたのか、少数の遺跡に集中的に出土する意味は何か等が今後の課題になりそうです。

また、遺跡発見の頃採集された双口土器（脚が付いたドーナツ形の器形に口が二か所あるという独特の形や文様を持った土器）やヒスイ製の獣形勾玉は九州では極めて珍しく、今もって謎の遺物といえます。

上加世田遺跡の遺物は、初期の調査の出土品は鹿児島県立埋蔵文化財センター（霧島市国分上野原）に河口コレクションとして保管され、その後の調査の出土品は加世田郷土資料館で見ることができます。

高橋貝塚（金峰町高橋）

阿多貝塚から北西方向1km程、平野部の南西端で吹上砂丘後背地の河岸段丘上に高橋集落があり、集落南端の玉手神社境内に高橋貝塚は存在します。昭和37・38（1962・1963）年発掘調査が行われ、わが国で本格的に農耕が始まった頃（3000～2500年程前の弥生時代早期～前期）の南九州を代表する遺跡であることが明らかになりました。弥生時代に珍しく貝塚をつくるのは、当時農耕だけでは生活できなかったからでしょうが、そのおかげでマガキを主とした大量の貝類や動物の骨（イノシシとシカが主）、骨角牙器（釣針や鏃、垂飾など）に混じって、南の海にしか生息しないイモガイ、ゴホウラの貝輪（腕輪）やその未製品、貝輪に不必要な除去部分を利用した道具などが発見されました（今日でも、これら南海産貝輪の未製品や除去部分が本土で発見されているのは高橋貝塚だけです）。

北部九州の弥生時代には、身分の高さを示す品物（威信財）の一つとして、厚手の貝で作られた貝輪がありました。当初この貝輪の素材は九州沿岸の大型巻貝と考えられましたが、やがて南の海にしか生息しないゴホウラやイモガイであることが判明し、さらにそれらは沖縄本島や周辺の島々から運び出されていることも明らかとなりました。ここに、沖縄と北部九州を結ぶ南海産貝交易ルート（貝の道）が想定されるようになったので

す。このルート上には、中継地の役割を果たした遺跡がいくつか存在した可能性が高いのですが、現在のところ本土で唯一確実な中継地としてあげられるのが高橋貝塚です。高橋貝塚では地元の土器に混じって北部九州の土器や珍しく南島の土器が出土していますし、集落の北端^{しもしやうじ}下小路遺跡では、本来の分布域（福岡県西部から佐賀県、長崎県の一部から熊本県北半部）から大きく離れて^{あわせぐちかめかんぼ}合口甕棺墓（ゴホウラの貝輪をもつ）も発見されました。これらも南海産貝交易に関係する遺物や遺構の可能性が高いと思われます。近年その近くの^{たかはし}高橋遺跡で弥生時代の木棺墓が検出され、また高橋貝塚から水田を隔てて東へ約 1km の中津野台地先端の微高地、金峰中学校敷地に存在する弥生時代早期の^{しもはら}下原遺跡（金峰町中津野）では南九州では極めて珍しい朝鮮系無文土器と思われる壺形土器も出土し、この地域は現在も南九州の弥生時代研究の上で目が離せない地域となっています。

高橋貝塚・下小路遺跡の出土遺物は県立埋蔵文化財センターで河口コレクションとして保管されていますが、その一部と主要な遺物のレプリカを南さつま市歴史交流館金峰で見ることができます。また下原遺跡出土遺物は、県立埋蔵文化財センターで保管されています。

^{まつきぎの}松木菌遺跡（金峰町尾下）

高橋貝塚から水田を隔てて東へ約 1km、田布施平野中央部に舌状に伸びる尾下台地の一角に松木菌遺跡は存在します。昭和 50（1975）年畑の地下げによって大きな溝が発見され、その後紆余曲折を経ながら 6 回の発掘調査が実施されました。しかし、未調査のまま地下げなどにより消えてしまった箇所も多いです。

松木菌遺跡に残る溝は、これまでのところシラス面まで削平された状態で検出され本来の大きさが分かりませんが、1 回目の調査でわずかに残っていた削平前の本来の地層との関係から大きさは幅 4～5m、深さ 2.5～3m 以上と推定され、南九州最大規模の大溝であることが分かっています。大溝の形状は断面 V 字形で、簡単には飛び越えられない幅と簡単には登れない深さと角度を持ち、集落を防禦するための施設であった可能性が高いと思われます。ただし、この大溝が集落を囲むのか、台地を横断して周辺地形と集落を切り離しているのかまだはっきりとはしません。大溝が 1 m 程埋没した時点で大量の土器類が投棄されていました。残りの良い場所では、大溝の東側から投棄されていることが分かっていますので、集落は大溝の東側（金峰山側）に存在することが考えられます。出土土器は、松木菌遺跡調査が始まる時点では南九州で不明瞭となっていた弥生時代後期（2000 年程前）の土器であることが明らかとなり、松木菌式土器と命名されました。また、この土器に混じって、東南部九州、中北部九州、瀬戸内方面の土器が出土し、この遺跡を形成した人々がかなり広い地域と交流をもっていたこともわかりました。

このように大規模な溝をもち広い地域と交流していたこの集落は、当時の地域拠点となる集落であったことが考えられます。弥生時代は一昔前の頃には平和な農村風景がイメージされていましたが、遺跡の調査や研究の進展によって、集落の統合や地域の統合に伴って戦いが起こっていた時代であったと考えられるようになってきました。おそらく松木菌遺跡の大溝もそのような時代背景の中で構築されたものと考えられます。これまでの出土

遺物を見れば、高橋地区と松木藪遺跡を含む尾下地区はそれぞれに地域の弥生時代前半期と後半期を担う集落が存在したように見え、緊張に伴い地域拠点となる集落がより内陸部へ移動した可能性も考えられます。しかしこれまでの調査では遺跡の姿は垣間見えただけで、まだ分からないことだらけです。

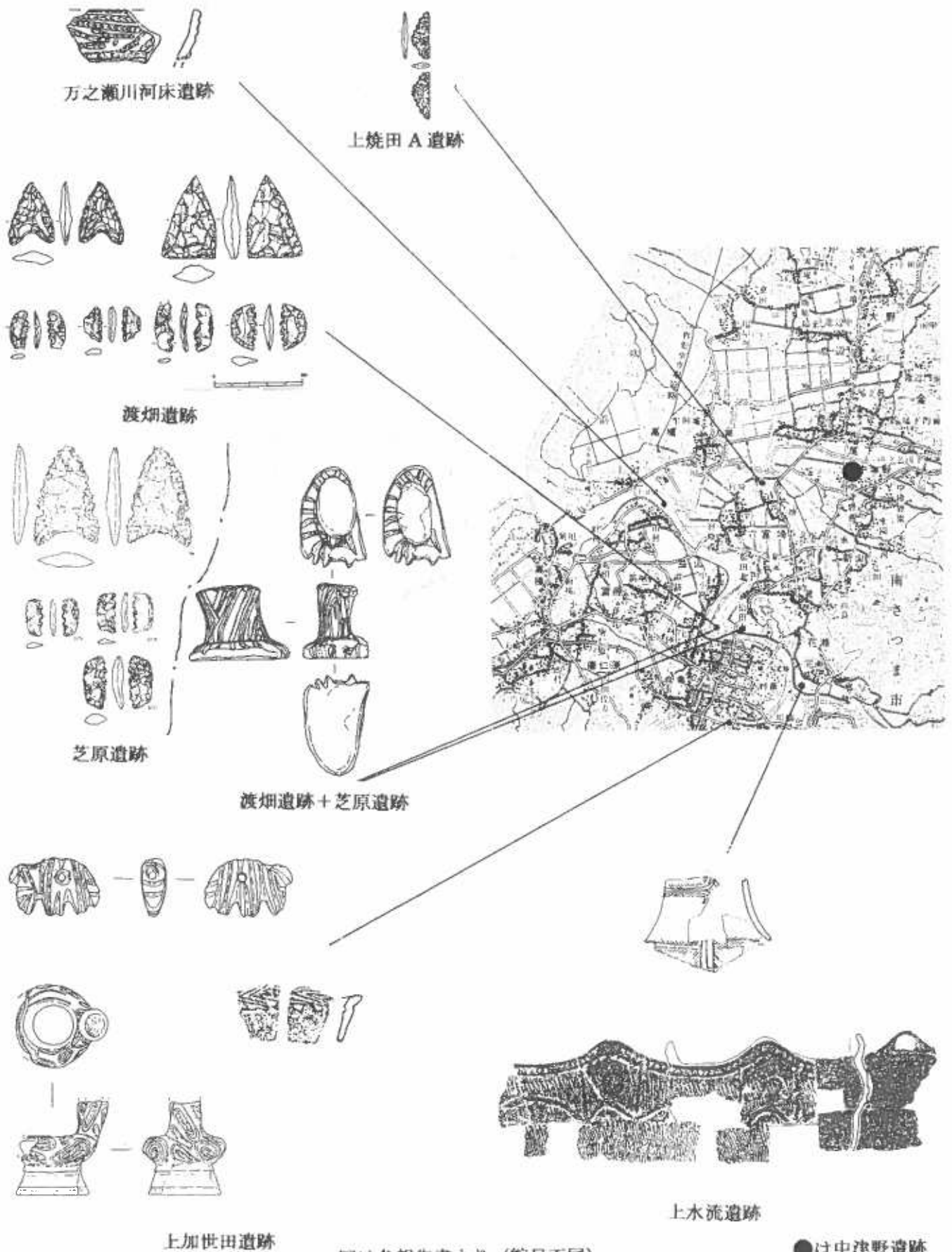
なお、出土遺物は南さつま市歴史交流館金峰に保管され一部が展示されています。

高橋貝塚では、発掘調査で奄美・沖縄諸島に主たる分布域を持つ仲原式土器が出土し注目されましたが、その後上加世田遺跡では大隅諸島に主たる分布域を持つ一湊式土器が、**上水流遺跡（金峰町花瀬）**では仲原式土器の有文土器が、**万之瀬川河床遺跡（金峰町高橋）**では奄美・沖縄諸島に主たる分布域を持つ面縄東洞式類似の土器や奄美諸島に主たる分布域を持ついわゆる弥生系土器が報告され、量的には少ないながらも、他地域と比較すると万之瀬川下流域には際立って南島由来の縄文時代や弥生時代の土器の出土例が増えつつあります。すでに縄文時代前期土器（6000年程前）には、確実に九州本土系の土器が南下して沖縄本島に到達しているのがわかっていますので（土器が動く背景には、当然人の動きがある訳ですので）、頻繁ではないにしても縄文人達は丸木舟を駆使しながら奄美・沖縄諸島まで動き回っていたと考えられます。この地域はその拠点の一つだったのかもしれませんが。弥生時代の南海産貝交易ルート（貝の道）も、これを利用する形で開拓された可能性が高く、高橋貝塚がルートの中継点になっていることもそれと関係しての事でしょう。

その他**芝原遺跡（金峰町宮崎芝原）**や隣接する**渡畑遺跡（金峰町宮崎渡畑）**では東日本縄文文化と関わりがあると思われる足形土製品や西北九州の縄文漁労具といわれる組み合わせ銚（鋸歯状尖頭器や鋸歯縁石器）が、同じく芝原遺跡の弥生時代遺物の中には北部九州と関わりがある破鏡や小形仿製鏡の出土が報告されています。また**諏訪前遺跡（金峰町大野）**では、西日本に点在して発見される龍が描かれた弥生終末期の土器が出土し注目されています。

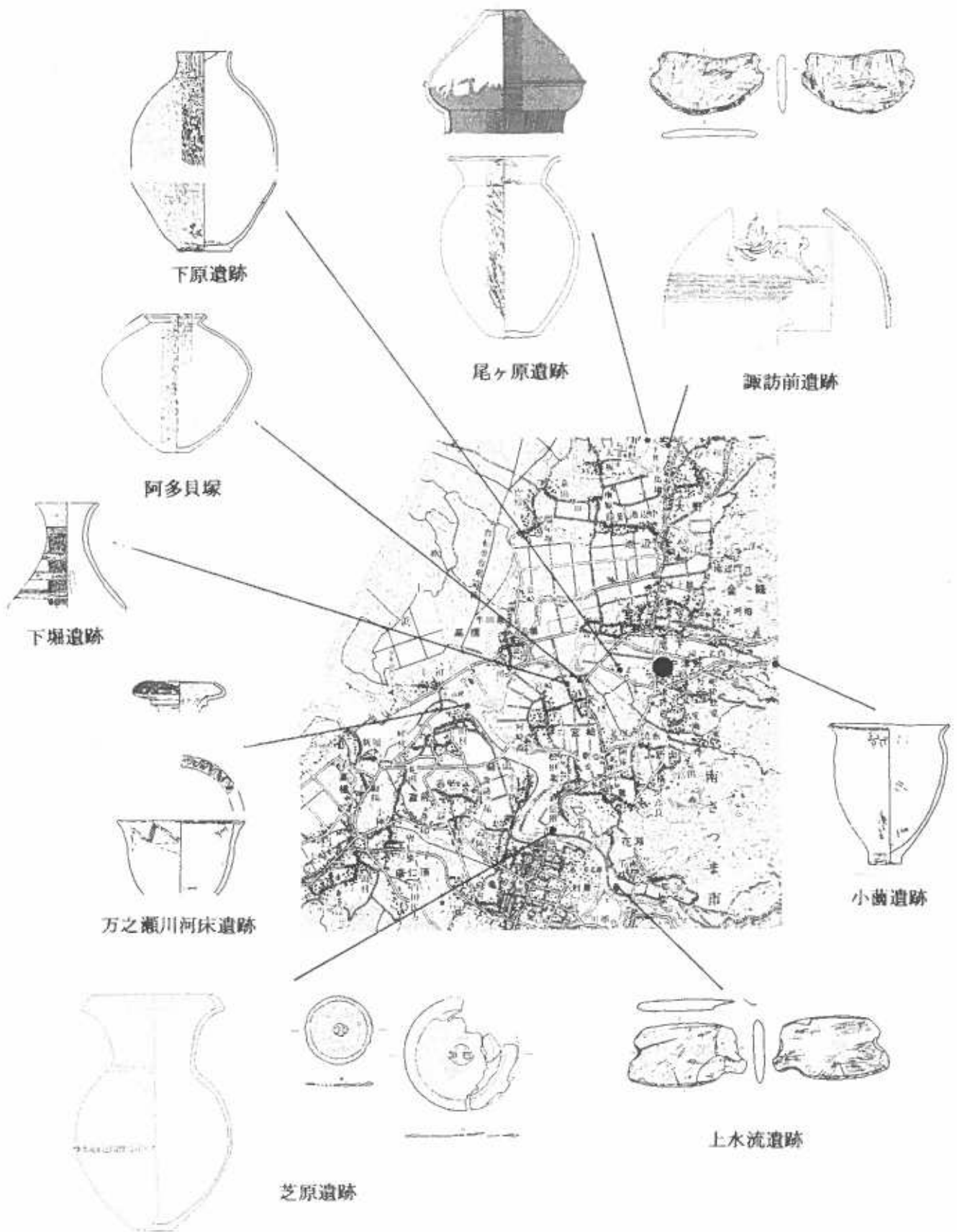
ここまで述べてきましたように、この地域には日本各地との交流や交易を暗示する遺物が散在しています。今回**中津野遺跡（金峰町中津野）**で準構造船の舷側板が出土したとの報に接し、私としては出土するべくして出土したとの感が強く、さらに今後交流・交易に強く関係する資料がこの地域で発見され、縄文・弥生時代の交流・交易の実態が明らかになっていくことを期待したいと思います。

中津野遺跡周辺で発見された他地域との交流に関わる遺物 (縄文時代)



図は各報告書より (縮尺不同)

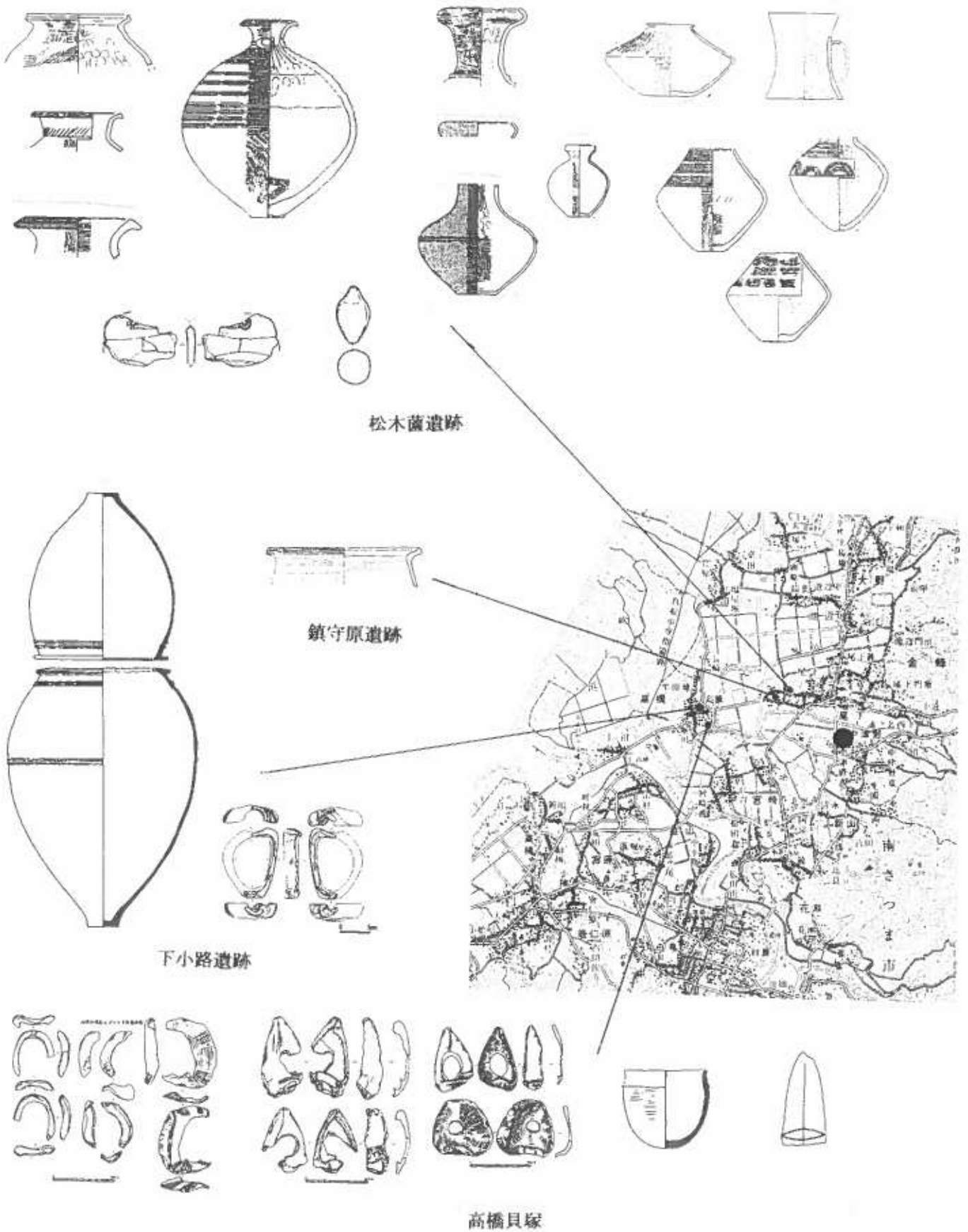
中津野遺跡周辺で発見された他地域との交流・交易に関わる遺物（弥生時代1）



図は各報告書より（縮尺不同）

●は中津野遺跡

中津野遺跡周辺で発見された他地域との交流・交易に関わる遺物（弥生時代2）



図は各報告書より（縮尺不同）

●は中津野遺跡

話題にした遺跡の位置

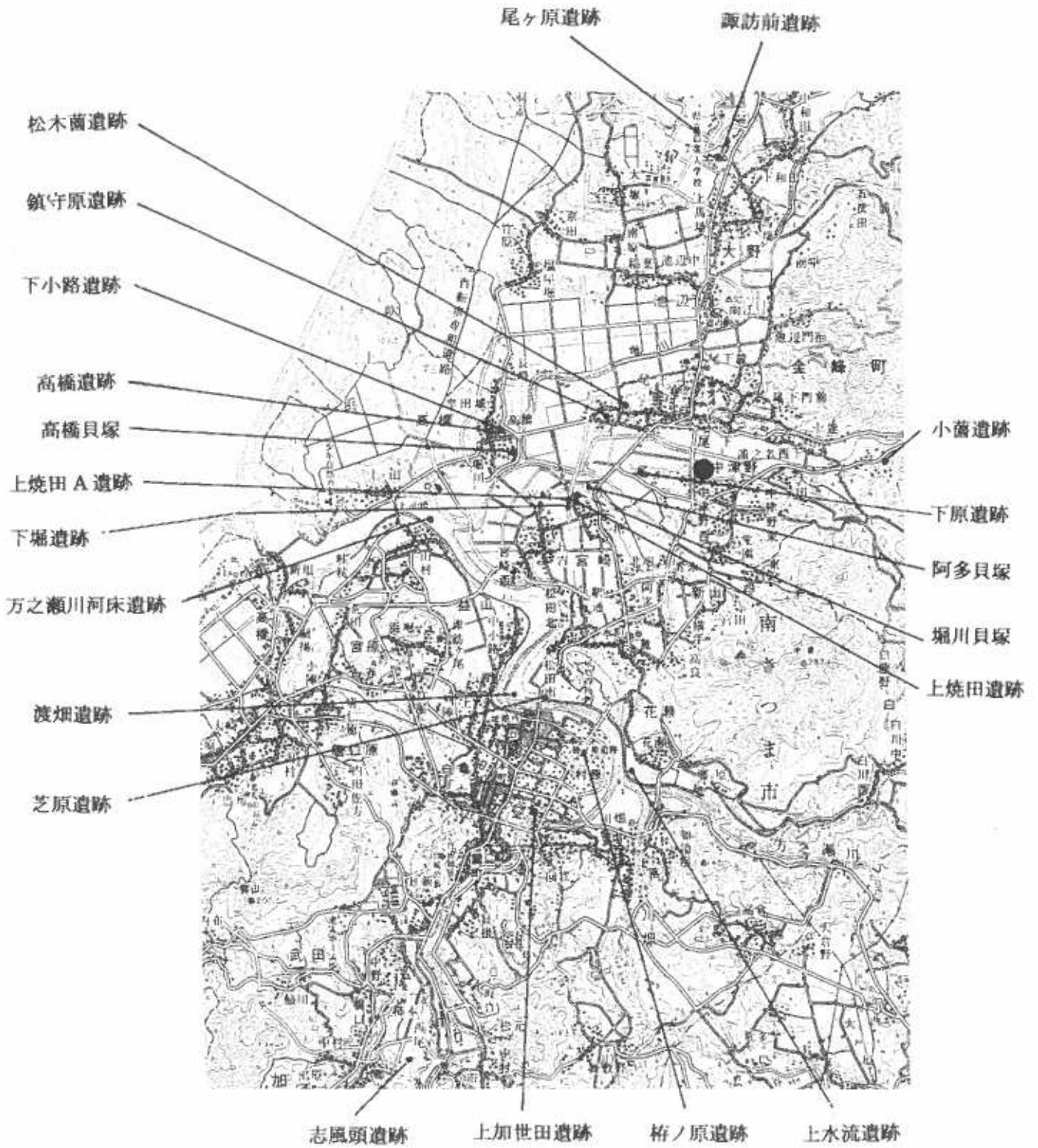




写真2 白糸原遺跡出土遺物(鹿児島県埋蔵文化財センター(2005)より)

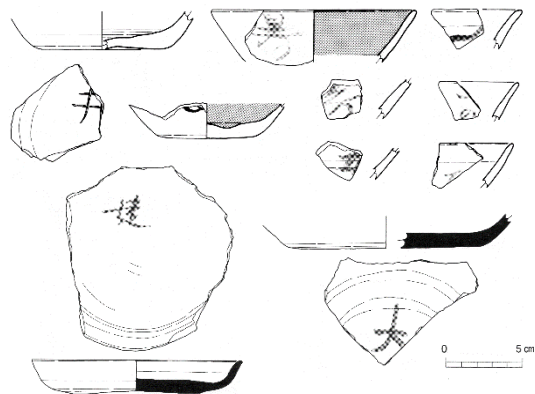


図2 筆付遺跡出土遺物(金峰教育委員会(2004)より)



写真3 小中原遺跡出土遺物(鹿児島県埋蔵文化財センター(1991)より)

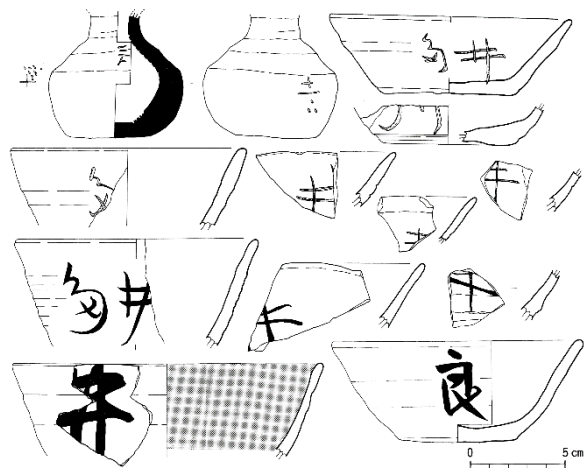


図3 山野原遺跡出土遺物(金峰教育委員会(1995)より)

出土しており、特に注目されるのは「阿多」と刻書された土器です。官衙的な性格が強い遺構・遺物が検出されていることから、郡衙に関係がある遺跡と推定されています。

5 山野原遺跡(図3)

平安時代前期が主体の遺跡であり、掘立柱建物跡や土坑墓、祭祀に関する土坑、溝状遺構が検出され、須恵器や土師器などが出土しました。墨書土器やヘラ書き土器も出土しており、「多井」、「三ト」、「良」などの文字が記されています。特に、「三ト」や「良」は祭祀的な性格をもっており、祭祀に関する土坑も検出されていることから、何らかの祭祀行為がおこなわれていた可能性が高いことが指摘されています。また、官衙的な性格が強い遺構・遺物が検出されていることから、在地の豪族の居住集落であった可能性が指摘されています。

【参考文献】

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター(1991)『小中原遺跡』、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書57.
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター(2005)『白糸原遺跡』、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書86.
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター(2011)『南下遺跡』、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書157.
- 金峰町教育委員会(1995)『山野原遺跡』、金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書7.
- 金峰町教育委員会(2004)『筆付遺跡』、金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書17.

中世～近世の中津野遺跡の周辺

—中国の石造物と中津野遺跡出土ベトナム陶器に注目して—

南さつま市教育委員会 橋口 亘

中津野遺跡が立地する万之瀬川水系の一带は、中世～近世の海外産の稀少な遺物が多数発見されている場所であり、古くから当該地域をめぐる対外交流の歴史が注目されています。

今回は、数ある海外関係遺物のうち、万之瀬川水系流域における中国の石造物と、中津野遺跡から出土したベトナム陶器について注目し、簡単に紹介を行います。

1. 万之瀬川水系流域における中国の石造物（薩摩塔・宋風獅子・中国製石仏）

万之瀬川水系流域では、薩摩塔・宋風獅子・中国製石仏などが見つかっており（表1・図1）、これらは中世前期頃における中国の石造物として、硫黄貿易等を背景とした当該地域における中国商人らの活動によってもたらされたと考えられます（橋口 2014b、橋口・松田 2015）。

南さつま市金峰町地域においては、万之瀬川河畔の芝原遺跡で薩摩塔の部材が発見されており、詳細不明であった薩摩塔の頂部の造形が判明した実例として、薩摩塔に相輪形態の部位が存在することを示す極めて重要な資料となっています（橋口・松田 2013b）。また、上宮寺跡（和多利神社）では中国製石仏が確認されており、薩摩塔・宋風獅子以外の中国の石造物という意味で、当該地域に流入した中国の石造物の多様性をうかがわせる資料です（橋口・松田 2015）。

2. 中津野遺跡出土のベトナム陶器

中津野遺跡では、ベトナム産とみられる焼締陶器が出土しています（図5）。長胴壺（長胴瓶）などと呼称される胴の長い焼締陶器の壺の破片です。

ベトナム焼締陶器長胴壺については、中津野遺跡と同じ南さつま市金峰町内では、万之瀬川河畔の上水流遺跡において出土例があります（鹿児島県立埋蔵文化財センター2008）。

当該地域における対外交流等の歴史を考える上で、中津野遺跡出土のベトナム焼締陶器長胴壺は、内容物のことなどを含め、たいへん興味深い資料と言えます。

今回皆さんに紹介した中国の石造物や中津野遺跡出土ベトナム陶器などから見ても、それぞれの時代において、中津野遺跡が所在する万之瀬川水系流域の一带はもとより、薩摩、九州南部の地が歩んできた「海に開かれた歴史」がうかがえるのです。

表1 九州南部の薩摩塔・宋風獅子・中国製石仏 一覧表

| 位置番号 | 名称・〔所在地〕 | 備考 | 出典〔初出文献等〕 |
|------|--------------------------------|--|---|
| ① | 坊津薩摩塔 〔南さつま市坊津町坊〕 | 現在、坊津歴史資料センター輝津館に収蔵 (伝)坊津一乗院跡(南さつま市坊津町坊)に旧所在 | 齋藤 1958 |
| ② | 下里薩摩塔(虎御前供養塔) 〔南九州市川辺町神殿〕 | 層塔の上に載せられている | 川辺町役場 1961 |
| ③ | 水元神社薩摩塔・宋風獅子 〔南九州市川辺町清水〕 | 薩摩塔は(伝)雲朝寺跡(南九州市川辺町清水)出土 宋風獅子の来歴は不明であり、近年に他地点から発見地点(現在の水元神社薩摩塔の傍)へと移動されてきたものではないかと推測される | 〔薩摩塔〕 毎日新聞社 1961 〔宋風獅子〕 大木・古澤・高津・橋口・大石・市村 2013 |
| ④ | 寶光院跡薩摩塔 〔南九州市川辺町清水〕 | 現在、ミュージアム知覧(南九州市知覧町郡)に収蔵 (伝)寶光院跡(南九州市川辺町清水)出土 | 毎日新聞社 1961 |
| ⑤ | 飯倉神社宋風獅子 〔南九州市川辺町清水〕 | 2体(雌雄一対) | 橋口 2013d |
| ⑥ | 川畑薩摩塔 〔南さつま市加世田川畑〕 | ※⑧と同一個体の可能性あり | 橋口 2013c |
| ⑦ | 芝原遺跡薩摩塔 〔南さつま市金峰町宮崎〕 | 現在、鹿児島県立埋蔵文化財センター(霧島市国分)に収蔵 発掘調査出土遺物 | 橋口・松田 2013b |
| ⑧ | 地頭所薩摩塔(毘沙門塔) 〔南さつま市加世田地頭所町〕 | 近世地誌『加世田名勝史 二』に記載されるが、現存地不明 ※⑥と同一個体の可能性あり | 橋口 2013c |
| ⑨ | 益山八幡神社宋風獅子 〔南さつま市加世田益山〕 | 2体(雌雄一対) | 橋口 2013ab |
| ⑩ | 上宮寺跡(持鉢松)中国製石仏 〔南さつま市金峰町宮崎〕 | 宋風石仏 上宮寺跡(和多利神社)は小字「持鉢松」所在 | 橋口・松田 2015 |
| ⑪ | 当房通薩摩塔 〔南さつま市加世田小湊〕 | 中世加世田別府「唐坊」(「たうほう」)の比定地と考えられる小字「当房通」の墓地で発見 | 橋口・松田 2013c |
| ⑫ | 沢家墓地薩摩塔 〔霧島市隼人町神宮〕 | 大隅における薩摩塔の例 | 黒田 1974 |

〔橋口・松田2015掲載表を一部改変し、橋口亘作成〕

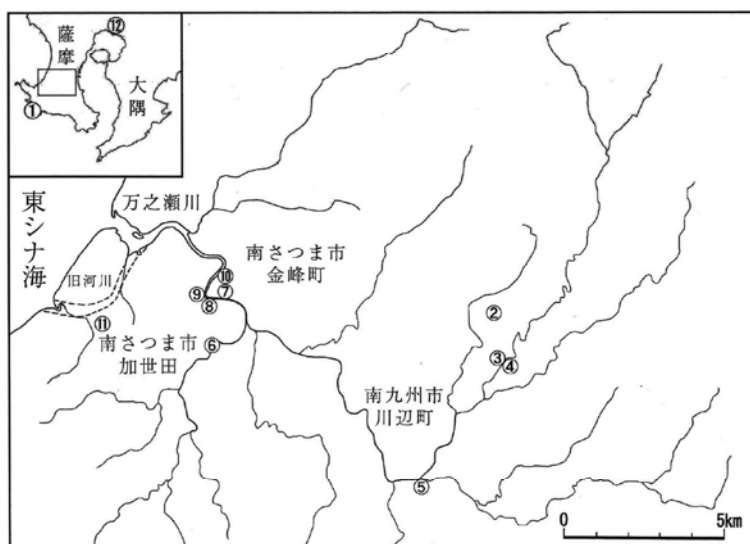


図1 九州南部の薩摩塔・宋風獅子・中国製石仏 分布図

〔橋口・松田2015掲載図を一部改変し、橋口亘作成〕

(齋藤 1958, 川辺町役場 1961, 毎日新聞社 1961, 黒田 1974, 橋口 2013abcd・2014b, 橋口・松田 2013bc・2015, 大木・古澤・高津・橋口・大石・市村 2013)

※表1及び図1：橋口 2017 より



図2 上宮寺跡の中国製石仏

図2の実測図・拓本・写真は、橋口亘・松田朝由 2015年「南さつま市金峰町宮崎字持鉢松の中国製石仏（1）一万之瀬川下流域の上宮寺跡で発見された宋風石仏と周辺の宗教遺物・遺構―」『南日本文化財研究』No.25（『南日本文化財研究』刊行会）の3頁から引用（実測図は松田朝由作成、正面拓本は橋口亘作成、側面拓本は松田朝由作成、写真は橋口亘撮影）。

※図2：橋口 2017 より

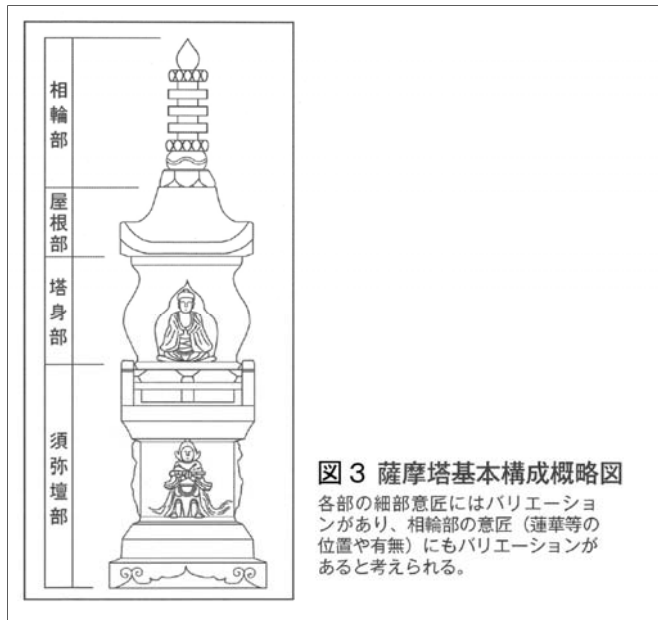


図3 薩摩塔基本構成概略図

各部の細部意匠にはバリエーションがあり、相輪部の意匠（蓮華等の位置や有無）にもバリエーションがあると考えられる。



【参考写真】水元神社（南九州市川辺町）の薩摩塔

※図3：橋口 2013b より（図版番号は改変）



図4 芝原遺跡出土の薩摩塔破片

図4は、薩摩塔の相輪部の破片であるとみられている（橋口・松田 2013b）。

図4の実測図は、鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012年『芝原遺跡3』（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170）の381頁から引用）。

図4の写真画像は、鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012年『芝原遺跡3』（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170）の図版69から部分引用。同書によれば、同書の遺物写真撮影者は吉岡康弘・西園勝彦・辻明啓の3氏。

※図4：橋口 2017 より

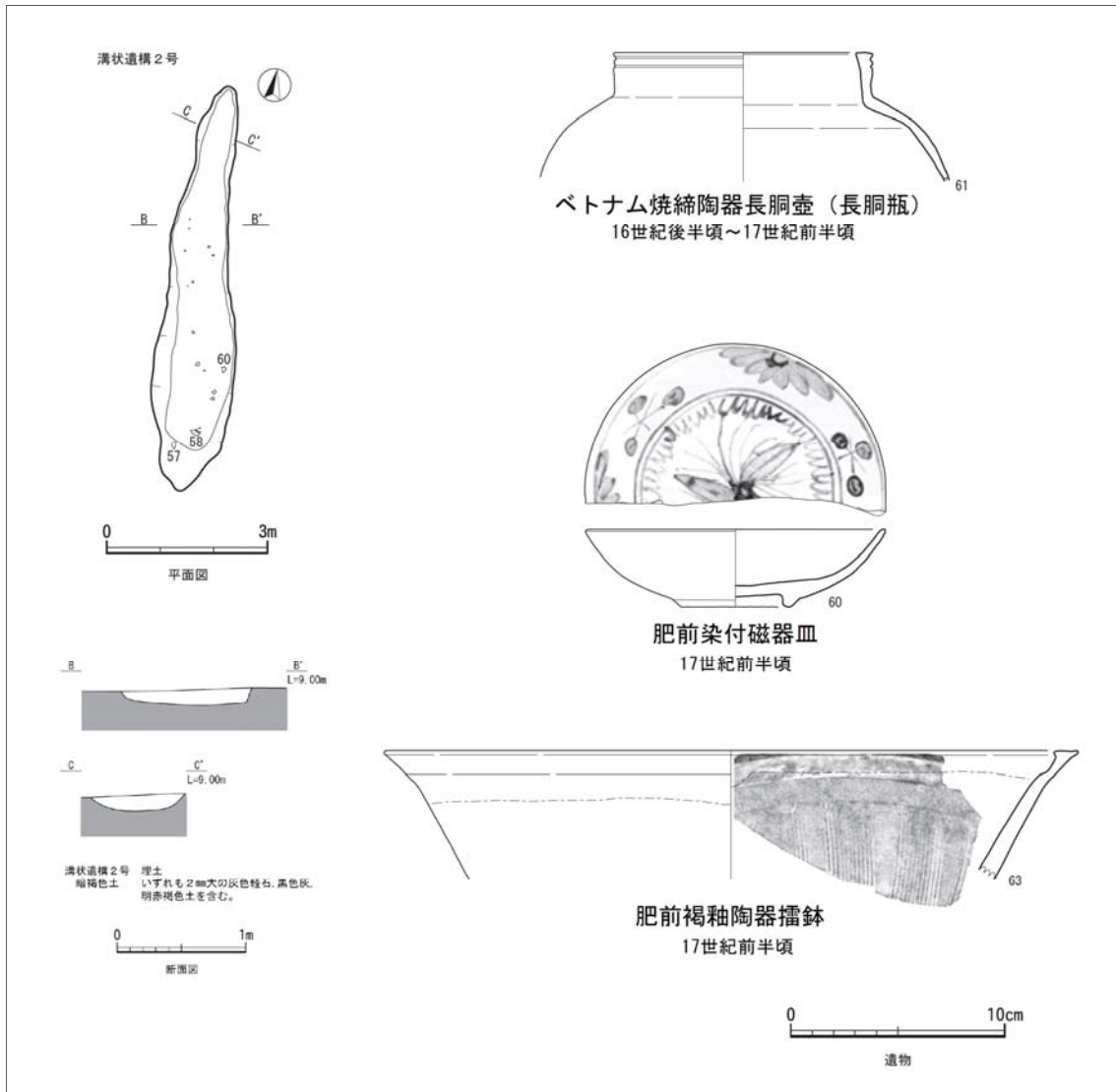


図5 中津野遺跡出土のベトナム焼締陶器長胴壺ほか

実測図引用：鹿児島県立埋蔵文化財センター（報告書記載の編著者氏名は鮫島えりな・倉元良文・湯場崎辰巳）2022『中津野遺跡 低地部・低湿地部編 第1分冊』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(217) 鹿児島県立埋蔵文化財センター 56頁より

※（遺物名称と年代観は加筆）



**中津野遺跡出土の
ベトナム焼締陶器長胴壺の写真**

※資料の熟覧と写真撮影にあたっては、鹿児島県立埋蔵文化財センターの関明恵氏をはじめとする皆様方の御協力を得ました。

【引用・主要参考文献】

- 井形進 2008 「首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔」久山町白山遺跡調査指導委員会・久山町教育委員会編『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
- 井形進 2013 『薩摩塔の時空 異形の石塔をさぐる』花乱社選書4 花乱社
- 家田淳一 2000 「Ⅱ 肥前（佐賀県）の製品について 陶器の編年 2. 播鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水柱・灯火具」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10 周年記念—』九州近世陶磁学会
- 岩元康成 2014 「中世後半から近世初頭の南九州における東南アジア陶磁器と華南三彩」『Archaeology From the South II』新田栄治先生退職記念論文集 新田栄治先生退職記念事業会上床真 2014 「万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介」『研究紀要・年報 縄文の森から』第7号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 江平望 1991 「中世加世田別府史」（「第二編 通史—笠沙の歴史展開— 第三章 中世」『笠沙町郷土誌』上巻）笠沙町
- 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘 2009 「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」『鹿児島大学理学部紀要』42 鹿児島大学理学部
- 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘・大石一久・市村高男 2013 「薩摩塔石材と中国寧波市の下部白亜系方岩組地層との対比」『鹿児島大学理学部紀要（地学・生物学）』46 鹿児島大学理学部
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小葉田淳 1933 「中世に於ける硫黄の外國貿易と其産出」『經濟史研究』第43号 日本經濟史研究所
- 鹿毛敏夫 2006 『戦国大名の外交と都市・流通—豊後大友氏と東アジア世界—』思文閣出版
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター（報告書記載の編著者氏名は溝口 学・東郷克利・森 雄二・拔水茂樹・富山孝一・黒川忠広・上床 真）2008 『上水流遺跡 2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター（報告書記載の編著者氏名は関明恵・長崎慎太郎・有馬孝一・上床真・平屋大介・大久保浩二、遺物写真撮影者氏名は吉岡康弘・西園勝彦・辻明啓）2012 『芝原遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（170）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター（報告書記載の編著者氏名は鮫島えりな・倉元良文・湯場崎辰巳）2022 『中津野遺跡 低地部・低湿地部編 第1分冊』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（217）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 亀井明德 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号 上智大学アジア文化研究所
- 川口洋平・中山圭 2012 「九州西岸における東南アジア陶磁と華南三彩」『貿易陶磁研究』No.32 日本貿易陶磁研究会
- 川辺町役場 1961 「これも貴重な文化財—神殿虎御前の墓—」『広報かわなべ』1月号〔第39号〕
- 菊池誠一・阿部百里子 1998 「第2節 ベトナム焼締陶器の分類と製作技法」（第7章 ホイアン出土の陶磁器）（IV 成果と課題）（ベトナムの日本町：ホイアンの考古学調査）『昭和女子大学国際文化

研究所紀要』4 昭和女子大学

菊池誠一 1998 「第3節 ホイアン出土のベトナム焼締陶器の生産地」(第7章 ホイアン出土の陶磁器)(IV 成果と課題)(ベトナムの日本町 : ホイアンの考古学調査)『昭和女子大学国際文化研究所紀要』4 昭和女子大学

黒田清光 1974 「解説 南九州の石塔について」『川内市史 石塔編』 鹿児島県川内市

齋藤彦松 1958 『造形史学手記』第19冊(南九州市教委所蔵)

重久淳一 2004 「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『シンポジウム 陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』 東南アジア考古学会事務局

高津孝・橋口亘 2008 「薩摩塔小考」『南日本文化財研究』No.7 『南日本文化財研究』刊行会

高津孝・橋口亘 2010 「謎の石塔“薩摩塔”」『順風往来—薩摩をめぐる東アジア海域交流史—』 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

高津孝・橋口亘・大木公彦 2010 「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」『鹿大史学』57号 鹿大史学会

高津孝・橋口亘・大木公彦 2012 「薩摩塔研究(続)—その現状と問題点」『鹿大史学』59号 鹿大史学会

續 伸一郎 1993 「ベトナム製焼締長胴瓶・四耳壺について—堺環濠都市遺跡の出土品を中心として—」『貿易陶磁研究』No.13 日本貿易陶磁研究会

續 伸一郎 2010 「堺環濠都市遺跡から出土したベトナム陶磁器」『海の道と考古学』 高志書院

坪根伸也 2003 「東南アジア産陶磁器と豊後府内」『平成15年度秋季(第22回)特別展 豊後府内 南蛮の彩り—南蛮の貿易陶磁器—』 大分市歴史資料館

中野雄二 2000 「Ⅲ 肥前(長崎県)の製品について 波佐見」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』 九州近世陶磁学会

新田栄治 1999 「近世薩摩出土の東南アジア陶磁と薩摩の海外活動」『黎明館開館十五周年記念特別展「海洋国家・薩摩—薩摩に鎖国はなかった—」図録』 鹿児島県歴史資料センター黎明館

野上建紀 2000 「Ⅱ 肥前(佐賀県)の製品について 磁器の編年(色絵以外) 1. 碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』 九州近世陶磁学会

橋口 亘 2002 「鹿児島県地域における16~19世紀の陶磁器の出土様相」『鹿児島地域史研究』第1号 『鹿児島地域史研究』刊行会

橋口 亘 2003 「中世薩摩における流通—出土陶磁器からみたその傾向—」『シンポジウム「流通・交通の中世考古学」発表資料集』 シンポジウム「流通・交通の中世考古学」実行委員会

橋口 亘 2010 「南九州から見た土佐—十五~十六世紀頃の貿易陶磁出土様相の比較と志布志大慈寺—石五輪塔—」『中世土佐の世界と一条氏』 高志書院

橋口 亘 2011 「南九州出土の東南アジア産陶磁についての—考察」『陶磁器流通と西海地域』 周縁の文化交渉学シリーズ4 関西大学文化交渉学教育研究拠点(ICIS)

橋口 亘 2012 「中世薩摩国河辺郡の考古学—郡域北部の川辺・坊津・硫黄島を中心に—」『平成24年度鹿児島県考古学会総会・研究発表会』資料集 鹿児島県考古学会

橋口 亘 2013a 「南さつま市加世田益山の八幡神社現存の宋風獅子—中世万之瀬川下流域にもたらさ

- れた中国系石獅子—『南日本文化財研究』No.18 『南日本文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2013b 「中世前期の薩摩国南部の対外交流史をめぐる考古新資料—南さつま市芝原遺跡出土 薩摩塔・同市加世田益山八幡神社現存の宋風獅子・三島村硫黄島発見の中国陶磁器を中心に—」『鹿 児島考古』第43号 鹿児島県考古学会
- 橋口亘 2013c 「南さつま市加世田川畑現存の薩摩塔」『南日本文化財研究』No.19 『南日本文化財研 究』刊行会
- 橋口亘 2013d 「南九州市川辺町宮の飯倉神社現存の宋風獅子」『南日本文化財研究』No.19 『南日本 文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2014a 「九州南部の薩摩塔と宋風獅子—万之瀬川流域で発見された新出資料を加えての考察 —」『西日本における中世石造物の成立と地域的展開—石材と形態・様式に着目して—』2011~2013 (平成23~25)年度科学研究費補助金基盤研究(B)23320138研究成果報告書
- 橋口亘 2014b 「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題—薩摩塔・宋風獅子・貿易陶磁・清水磨崖 仏・硫黄交易—」『鹿児島考古』第44号 鹿児島県考古学会
- 橋口亘 2015 「南薩摩の薩摩塔をめぐる諸問題—中世前期南薩摩への中国系石造物の流入と硫黄貿易 —」『歴史と地理』第685号(「日本史の研究」(249)) 山川出版社
- 橋口亘 2017 「補遺・薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題—南さつま市上宮寺跡の中国製石仏・ 南さつま市及び三島村の磁窰窯系稀少製品を中心に—」『鹿児島考古』第47号 鹿児島県考古学会
- 橋口亘・松田朝由 2013a 「南さつま市芝原遺跡出土の中国系石塔(1)」『南日本文化財研究』No.16 『南日本文化財研究』刊行会
- 橋口亘・松田朝由 2013b 「南さつま市芝原遺跡出土の中国系石塔(2)—万之瀬川下流域から発見 された薩摩塔—」『南日本文化財研究』No.17 『南日本文化財研究』刊行会
- 橋口亘・松田朝由 2013c 「南さつま加世田小湊「当房通」の薩摩塔—万之瀬川旧河口付近「唐坊」比 定地の中国系石塔—」『南日本文化財研究』No.20 『南日本文化財研究』刊行会
- 橋口亘・松田朝由 2015 「南さつま市金峰町宮崎字持躰松の上宮寺跡の中国製石仏(1)—万之瀬川 下流域の上宮寺跡で発見された宋風石仏と周辺の宗教遺物・遺構—」『南日本文化財研究』No.25 『南 日本文化財研究』刊行会
- 橋口 亘・若松重弘 2015 「鹿児島県三島村硫黄島採取のベトナム焼締陶器」『南日本文化財研究』No.17 『南日本文化財研究』刊行会
- 毎日新聞社 1961 「薩摩塔の名で町文化財に 川辺町の三つの特殊仏塔」『毎日新聞』鹿児島版(11 月20日朝刊)
- 松田朝由 2008 「鹿児島県の薩摩塔」『南日本文化財研究』No.7 『南日本文化財研究』刊行会
- 宮下貴浩 1998 「鹿児島県持躰松遺跡と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 森村健一 2004 「塚から出土したタイ、ベトナム陶磁」『シンポジウム 陶磁器が語る交流—九州・沖 縄から出土した東南アジア産陶磁器—』 東南アジア考古学会事務局
- 森村健一 2008 「東アジア世界を見た龍顔・薩摩における茶の湯文化—上水流遺跡を定点として—」 『上水流遺跡 2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121) 鹿児島県立埋蔵文化財 センター

森本朝子 2000 「日本出土の東南アジア産陶磁の様相」『貿易陶磁研究』第 20 号 日本貿易陶磁研究会

森本朝子 2002 「ベトナム陶磁—日本における研究の成果と課題」『東洋陶磁史—その研究の現在—』東洋陶磁学会

柳原敏昭 2011 『中世日本の周縁と東アジア』 吉川弘文館

山内晋次 2009 『日宋貿易と「硫黄の道」』日本史リブレット 75 山川出版社

中津野遺跡の発掘調査成果～最古級の舷側板など～

鹿児島県立埋蔵文化財センター 鮫島 えりな

1 はじめに

中津野遺跡は、南さつま市金峰町に所在し、金峰山地中岳の北西麓から延びる標高約30mの舌状台地（中津野台地）上と境川の氾濫により形成された沖積地に立地しております。地形によって舌状台地上の台地部と沖積地の微高地にある低地部と水田が広がる低湿地部の3つの地点に分けることができます。

中津野遺跡は、昭和25年に河口貞徳氏が発掘調査を行い出土した土器が弥生時代終末に位置づけられた「中津野式土器」の標式遺跡として知られております。河口氏の調査地点から約400m西側を国道270号（宮崎バイパス）改築工事に伴い、平成18年度～21年度、25年度～29年度の9年間にわたり発掘調査が行われました。その結果、旧石器時代～近世に及ぶ多くの遺構・遺物が確認されました。そして平成24・26・30年度～令和3年度の6年間にわたり整理作業を行いました。これらの成果を発掘調査報告書として令和元年度に「台地部編」、令和3年度に「低地部・低湿地部編 第1・2分冊」を刊行しました。この令和4年8月に「低地部・低湿地部編 第3分冊」を刊行し、国道270号（宮崎バイパス）改築工事に伴うすべての事業が終了する予定です。

今回は、特に遺構・遺物が多く発見された低地部・低湿地部の成果を中心に、古代～近世（約1200年前～200年前）、弥生時代～古墳時代（約2700年前～1600年前）、縄文時代後期（約4000年前）の調査成果を紹介します。特に、令和3年4月に記者発表をおこなった弥生時代前期（約2500年前）の国内最古級の舷側板（準構造船の部材）について報告します。



図1 中津野遺跡位置図 (S=1/50,000)



写真1 遠景（東から野間岳を望む）



写真2 国道270号（宮崎バイパス）上空写真

表1 層位

| 低地 (15 ~ 29 区) | | | 低湿地 (11 ~ 15 区) | | | 低湿地 (2 ~ 11 区) | | |
|----------------|------------------------|-------------|-----------------|-----------------------------------|-------------|----------------|----------|-------------|
| I | 表土 | | I | 表土 | | I | 表土 | |
| II | 暗褐色～黒色土 | 近世～ 弥生時代 | II | 黒褐色土 | 近世～ 弥生時代 | II a | 灰～暗灰色粘質土 | 近世～ 古墳時代 |
| | | | | | | II b | 泥炭層 | 古墳～ 弥生時代 |
| | | | | | | II c | 青灰色土 | |
| III | 茶褐色～黒色土 | 縄文時代後期 | III a | 黒褐色粘質土 | 縄文時代後期 | III | 泥炭層 | |
| | | | III b | 黒褐色砂質土 | 縄文時代後期 | | | |
| IV a | 黄橙色火山灰土 (アカホヤ二次堆積土) | 縄文時代後期 | IV | 灰黄褐色～にぶい 黄橙色土(シルト質) アカホヤ火山灰 | | | | |
| IV b | 黄橙色火山灰土 (アカホヤ火山灰) | | | | | | | |
| V | 褐色土 | | V | オリーブ褐色土 | | | | |
| VI | 黒褐色土+暗褐色土 | | VI | 黒褐色土 | | | | |
| VII | 橙色土 | | | | | | | |
| | | | VIII | シラス堆積 | | | | |

※ 塗りは包含層



写真3 E-19～21区



写真4 E-13区



写真5 F-10区

表2 調査成果 (低地・低湿地部)

| 主な時代 | 主要な遺構 | 主要な遺物 |
|------|--|---|
| 縄文前期 | | 土器 (曾畑式) |
| 縄文中期 | | 土器 (深浦式・春日式) |
| 縄文後期 | 集石 2 基・土坑 3 基・埋設土器 1 基・遺物集中 (土器 9・石器 1)・軽石加工 1 基 | 土器 (南福寺式・出水式・指宿系・磨消系・小池原上層式・鐘崎式・市来系・丸尾式・北久根山式・西平式) 石器 (石鏃・石匙・スクレイパー・擦切石器・異形石器・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石皿) 軽石製品・円盤状土製品 |
| 縄文晩期 | | 土器 (黒川式・突帯文) |
| 弥生時代 | 竪穴住居跡 5 基, 土坑 17 基, 集積 1 基, 溝状遺構 1 条 | 土器 (夜臼式・刻目突帯文系・板付式系統・高橋式・入来式・黒髪式・須玖式・免田式・中津野式) 石器 (石鏃・石包丁・打製石斧・磨製石斧・磨石) 管玉 木製品 (農具・ハシゴ・舷側板) |
| 古墳時代 | 溝状遺構 1 条 | 土器 (中津野式～東原式)・木製品 (鳥形・柄等) |
| 古代 | | 土師器・須恵器・木製品 (柄・曲物) |
| 中世 | <低地部> 掘立柱建物跡 7 棟・柱穴 5 基・ピット 1019 基・土坑 13 基・溝状遺構 19 条・炉跡 2 基 | 輸入陶磁器 (白磁・青磁・青白磁・青花) 陶器 (古瀬戸・備前焼・常滑焼)・須恵器 (東播系・榊万丈系) 土師器・古銭・滑石製品・木製品 (杭・曲物) |
| | <低湿地部> | |
| 近世 | 足跡 3 か所・道跡 (敷粗朶, 暗渠, 杭群等) | 磁器 (肥前系・在地)・陶器 (薩摩焼)・寛永通宝 |

2 古代～近世（約 1200 年前～ 200 年前）

古代～近世の遺構・遺物はⅡ層で確認され、掘立柱建物跡や炉跡、土坑、溝状遺構、土木遺構などの遺構が検出され、遺物は、古代では土師器や須恵器、木製品などが出土し、中世では白磁や青磁、青花などの中国からの輸入陶磁器が主体を占め、備前焼や常滑焼などの国産陶器や土師器、中世須恵器、木製品などが出土し、近世では薩摩焼や肥前系磁器などの陶磁器などが出土しました。

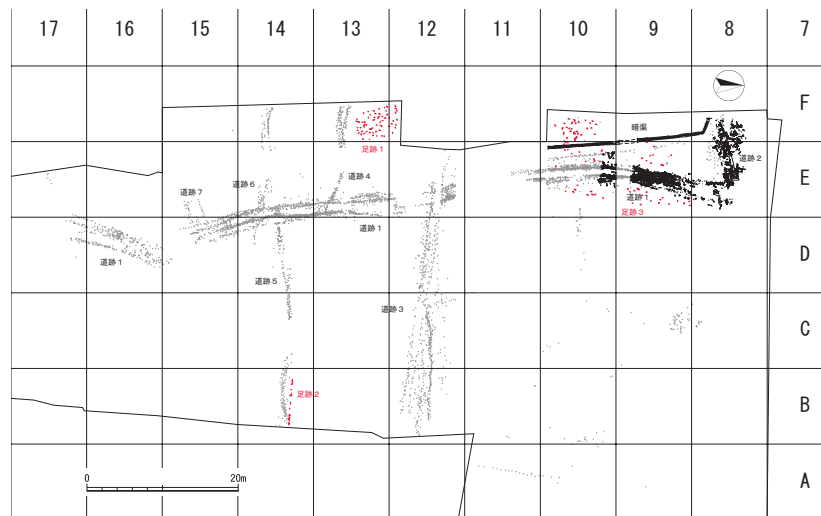


図2 中近世遺構配置図（足跡・土木遺構等）

遺構では特に低湿地部において大量の杭や丸木、板材、枝葉などの木材を使用して構築した大規模な土木遺構が検出され、それに伴う可能性のある当時の人々の足跡なども検出されました。土木遺構は古代～近世（11世紀～17世紀代）の道跡と考えられ、脆弱な地盤であった場所に大量の杭を打ち込み、板材や丸木、枝葉などを敷き詰めて地盤改良を行った痕跡だと考えられます。数千本の杭が出土したことから、かなり大規模な土木工事だと考えられ、当時の人々がこの場所に道路を通したいという強い思いが感じられました。



写真6 土木遺構出土状況 1



写真7 土木遺構出土状況 2

3 弥生時代～古墳時代（約 2600 年前～ 1600 年前）

弥生時代～古墳時代の遺構・遺物は低地部のⅡ層及び低湿地部のⅡb層で確認されました。古墳時代は溝状遺構1条を検出し、その中には多くの中津野式土器が出土しました。弥生時代は低地部において竪穴建物跡や土坑、集石などが検出され、多くの土器や石器が出土し、低湿地部からは少量の土器や石器と農具や梯子、船の部材などの木製品が約1000点出土しました。

(1) 古墳時代

古墳時代は低地部の南端において溝状遺構が1条検出されました。その溝状遺構の北側に遺物集中が広がっていました。その遺物集中からは甕形土器や壺形土器、鉢形土器、高坏などが含まれ、接合すると口縁部～底部までほぼ完全な形に復元することができました。これらは全て中津野式土器に該当しますが、昭和25年に河口貞徳氏が発掘調査を行った台地上の中津野遺跡出土の中津野式土器よりもやや古い土器群と考えられます。

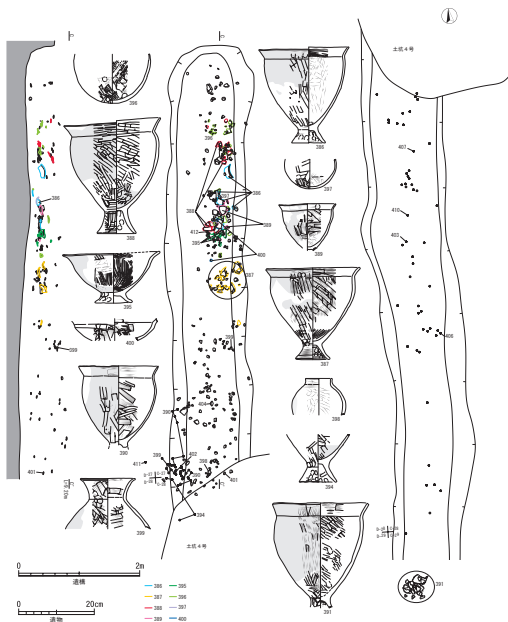


図3 溝状遺構20号出土状況



写真8 溝状遺構20号出土中津野式土器

(2) 弥生時代

ア 低地部

弥生時代は低地部において竪穴建物や土坑、集石などの遺構が検出され、包含層であるⅡ層からは土器や石器が出土しました。低地部の遺構から出土した土器や包含層から出土した土器はほぼ弥生時代前期前半～中期前半に含まれていました。

イ 低湿地部

低湿地部では遺構は検出されませんでした。およそ30m×40mの範囲で木製品集中部が見られました。ここからは鍬や鋤、柄といった農具や



写真9 木製品集中部しがらみ状出土状況

小型の梯子，船の部材である舷側板，板材や丸木などの部材などが約 1,000 点出土しました。これらの木製品は年代測定を行った結果，弥生時代前期～弥生時代中期に集中しています。特に船（準構造船）の部材である舷側板は弥生時代前期後半（約 2,500 年前）に相当し，これは準構造船の部材としては日本最古級ということがわかりました。

木製品集中部には複数の直線や曲線を描く出土状況や井堰状に組み合ったところもあり，これらは水田の畦畔である可能性があります。

(3) 舷側板

ア 舷側板について

舷側板は低湿地部の木製品集中部の東側，標高 5.09 m から出土しました。大きさは最大幅 30cm，最大長 272cm，最大厚 5 cm を測り，外面には 2～3 cm 幅のチョウナ痕が明瞭に残りますが，内面は細かい調整痕はあまり見られません。また，楕円形や方形の穿孔が 15 か所，方形の切り込みが 6 か所見られ，最大幅をもつ外面には段を作り，切り込み側の内面は斜めに面取りがみられます。樹種はカヤで，年代測定の結果では一番新しいもので弥生時代前期後半に該当する紀元前 5 世紀～4 世紀の値が出ております。これは，これまで出土した最古級の準構造船の部材（弥生時代前期末～中期前半に該当）よりも古く，国内最古級と考えられます。



写真 10 舷側板出土状況

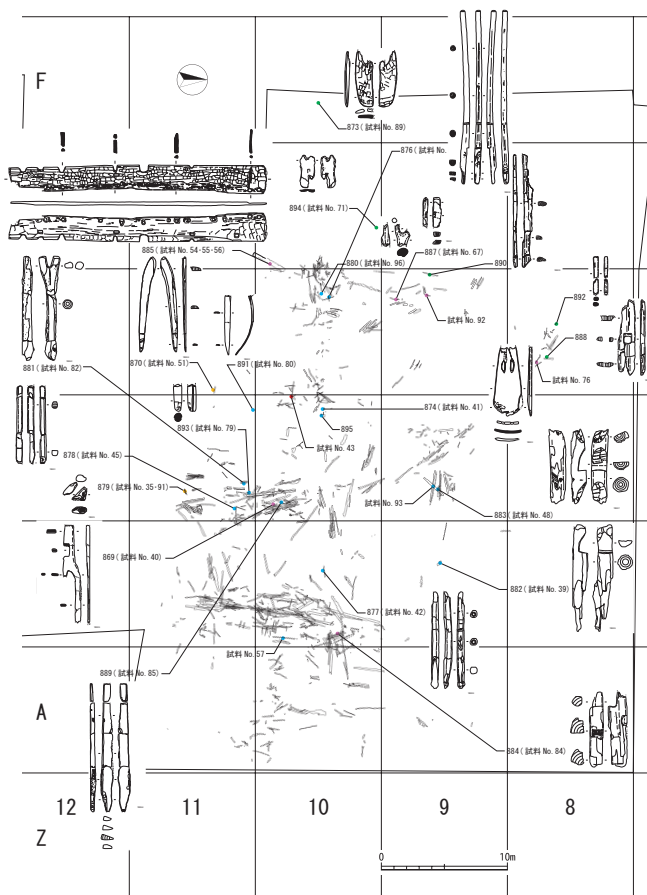


図 4 木製品集中出土状況



写真 11 舷側板

※ 古代の舟の種類について

- ・丸木舟（刳舟）…丸木をくり貫いて造った舟。
- ・準構造船…刳舟に舷側板などを付け足して舟の幅を大きくした舟。
- ・構造船…板材などの木材を組み合わせて造る船。近世の北廻船など。

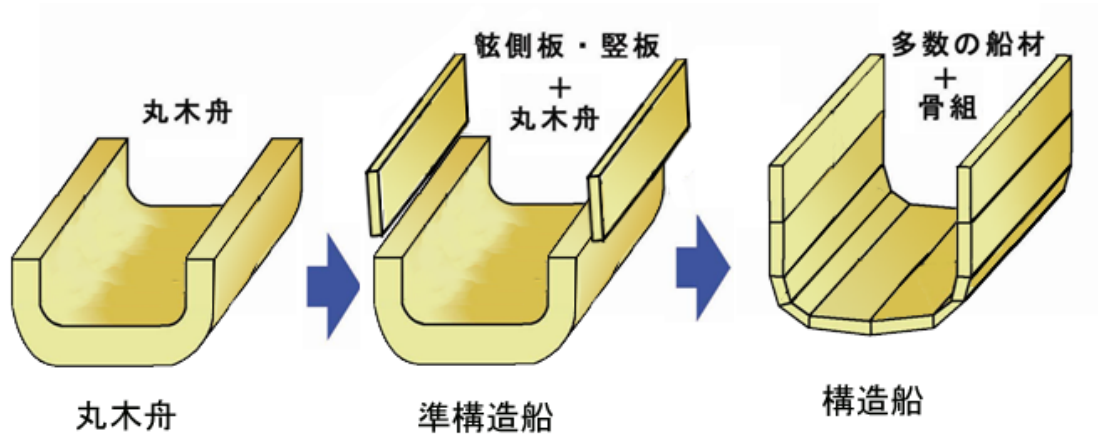


図5 船の構造模式図（図：守山市教育委員会）

※ 下長遺跡 HP (<http://shimonaga-iseki.yayoiken.jp/n-fune.html>) より引用

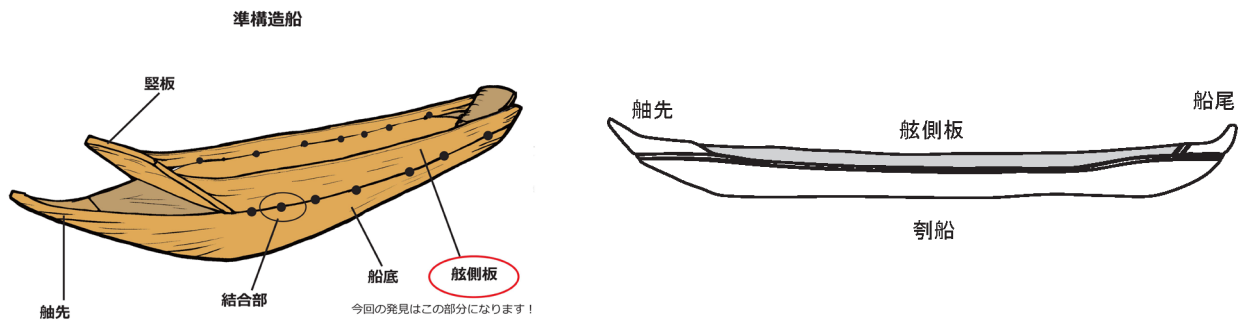


図6 準構造船模式図

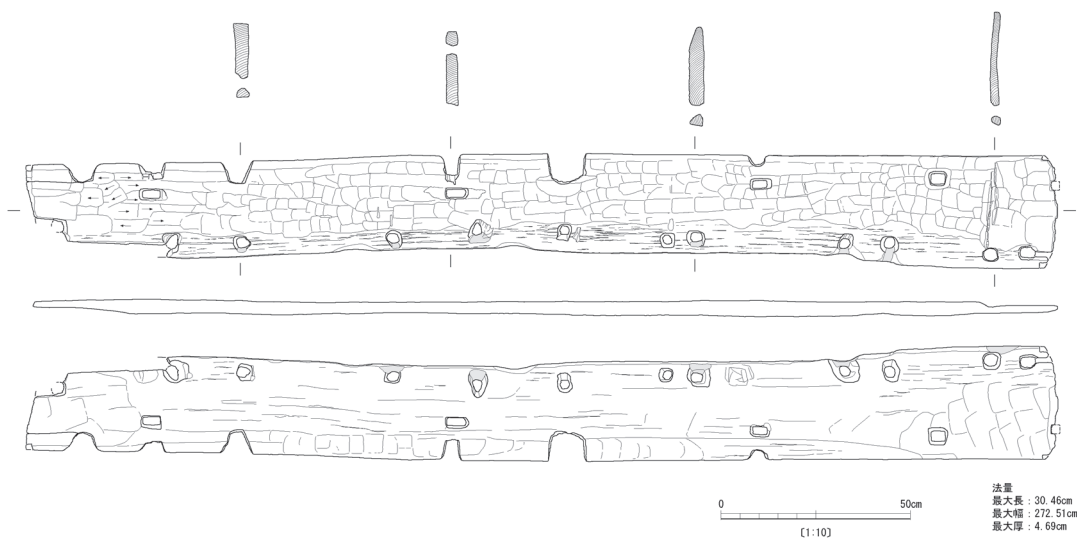


図7 舷側板実測図

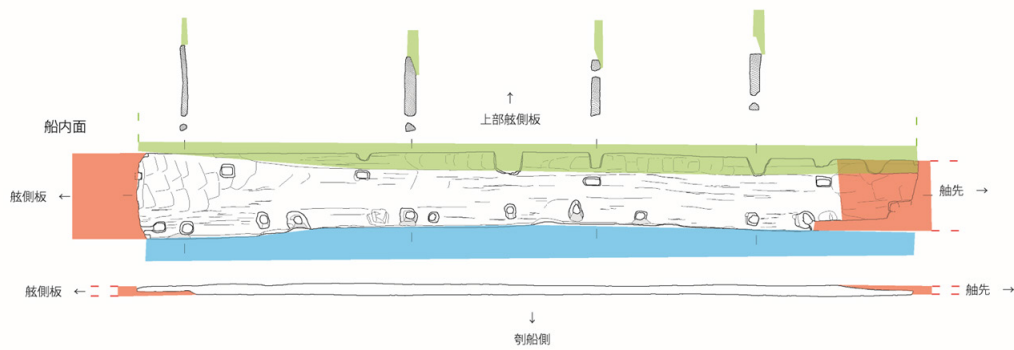


図8 舷側板使用方法復元案

イ 舷側板の使用方法と準構造船の復元

出土した舷側板には丁寧な調整を行う面と粗い調整のままの面があり、実際に舟として使用していた時は丁寧な調整が残る面を舟の外側にし、空気の抵抗を少なくしていたと考えています。また、舷側板の上下については穿孔が多い面を下にして、割船と繋いでいたものと考えられます。また、舷側板の一番幅の広い部分の外面にある段は、この段を利用してもう1枚の舷側板を接いでいたと考えられるので、その逆側の幅の細い部分には船首と接続していたものと想定されます。

以上のことから、出土した舷側板は、左舷に取り付けられた舷側板と想定されます。さらに、前に舟先の別材（舳先）、後ろにもう一枚舷側板が付くと推定され、全長7～8mの大型の舟となると思われます。このことから、全長7mを越える船が河川や海を通航して他地域と交流を行っていた情景が想起されます。

4 縄文時代後期（約4000年前）

縄文時代後期はⅢ層において土坑や集石、遺物集中が検出され、口縁部の破片数だけで1万点を超える大量の土器や石器が出土しました。特に低湿地部から大量の土器や石器が集中して出土しました。土器は縄文時代後期前半～中葉の土器型式である指宿式土器と松山式土器、市来式土器が主体を占め、他に後期初頭の出水式土器及び宮ノ迫式土器、福田K2式や後期中葉の小池原上層式及び鐘崎式、丸尾式などが出土しました。また、他地域からの搬入品と考えられる磨消縄文系土器（福田K2式・小池原式・鐘崎式など）は各時代に併行する土器型式が出土しており、これらの磨消縄文系土器と在地の土器の折衷系と考えられる土器も少数出土しており、他地域との交流の一端を垣間見ることができます。



写真12 縄文土器出土状況

5 おわりに

中津野遺跡は遺跡から西に約5km行くと東シナ海を臨み、また二級河川である万之瀬川という大きな河川からも約2kmと近い立地環境にあります。中世には低湿地部において大規模な土木工事が行われ、そこを道路として利用し、境川を渡る主要なルートであった可能性があります。また、弥生時代には、7mを越える準構造船を使用して高橋貝塚を拠点とした河川や東シナ海を通る海上交通の要所となっていた可能性が考えられます。このように中津野遺跡周辺は各時代を通して交流・交易・交通の要所であったと考えられることから、近隣からはさらに多くの遺構や遺物が出土する可能性があり、特に弥生時代の舟が出土する可能性も考えられます。今後は、今回の発掘調査で検出・出土した遺構・遺物が、中津野遺跡周辺の歴史をさらに深掘りして、金峰や南薩地域の歴史をひもとく一助となればと思います。

【参考・引用文献】

東広島市出土文化財管理センター編 2017「平成29年度出土文化財企画展 弥生時代の船と交易品」
東広島市教育委員会

柴田昌児 2017「準構造船考」『考古学研究会岡山6月例会』発表資料

柴田昌児 2013「古代瀬戸内海における海上活動に関する一試論」『みずほ別冊 弥生研究の群像』大阪弥生文化の会



写真13 縄文時代後期の土器（左：指宿式，右：松山式・市来式）

令和4年度 発掘調査予定遺跡

埋蔵文化財センターでは、県内各地で発掘調査を行っており、その様子を見学することができます。見学を希望される場合は、県立埋蔵文化財センターか公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター、市町村教育委員会にお問い合わせください。

- ▲ 県立埋蔵文化財センターが調査する遺跡
 - (公財)埋蔵文化財調査センターが調査する遺跡
 - 市町村教育委員会が行う調査で県立埋蔵文化財センターが支援する遺跡
- ※【 】内は、調査期間(予定)です。見学に行かれる際は、事前に各担当組織にご確認ください。

